徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義

黒江, 俊子 / KUROE, Toshiko

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

159

(終了ページ / End Page)

171

(発行年 / Year)

1962-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010822>

徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義

黒 江 俊 子

序

幕末外交史上特筆すべきもの一つに、徳川昭武の渡欧があるが、これは当時幕府より欧米に対して前後五回にわたって派遣された使節の中の第五回目にあたるのがそれである。

即ち第一回は、万延元年遣米使節新見正興・豊前守一行、第二回は、文久二年遣欧使節竹内保徳・下野守一行、第三回、文久三年遣仏使節池田長発・筑後守一行、第四回慶応二年遣露使節小出秀実・大和守一行、第五回慶応三年遣仏使節徳川昭武・民部大輔一行で、この外に慶応元年柴田剛中・日向守を特命理事官に任用して英仏両国に派遣したのもある。

幕末の外交は、諸外国の貿易による経済的進出によって開かれ、そのために起る政治的折衝で殆んど埋められ

ている。そしてこれら遣外使節の夫々にはその使命と目的があったわけであるが、何れも徳川三百年の政策の伝統を破って開国に向い、国際場裡へ進出しようとしている日本の夜明け前としての時期に行われたのであった。

徳川昭武の渡欧にも、その意味で我が国と欧州各国との政治的関係を見ることができ、特に我が国との外交や通商を支配しようとして押し出して来た英・仏両国葛藤の中においては、当時の外交史解明上必ず見て行かねばならないことであるが、今回は昭武本来の使命たる万国博覧会参加という点にしぼって論を進めたいとおもう。

一、徳川昭武渡欧の事情

昭武は水戸藩主斉昭の第十八子として嘉永六年九月二十日に生れ、將軍慶喜の弟に当る。慶応二年十一月廿八日に、「松平民部大輔来年於仏国博覧会有之候に付為御

使被差遣候旨被仰出之」(第一)

という達書が水戸藩家老衆宛に出された。当時昭武は十四才の少年であったのである。続いて同日付で松平民部大輔昭武は清水家相続を被仰付、向後徳川を称することになり、更に種々の手続きを経て將軍慶喜の名代となり、渡仏の運びとなっている。その時持参の国書に、

「恭しくユーマーイエステイト仏蘭西国帝に白す今般貴国都府に於て宇内各州の産物を蒐集し博覧会の挙ありときく定て同盟の国々顯貴集会あらん事と遙に欣羨にたへず依て余か弟徳川民部大輔をして余か代りとして同盟の親誼を表せしむいまた少年にて諸事不馴の事に候間厚く垂教を乞ふ且右礼典畢て其都府に留学せしめ度宜く教育あられ度猶追々生徒も差渡すべく候間其筋へ命令あられん事を乞ふ併て貴下の幸福を祝し貴国人民の安全を祈る不宣。慶応三年丁卯正月

源慶喜(第一)

とあり、昭武は仏国政府の勧誘により、万国博覧会参加のための使節として差遣わされたのであったが、序を以て御条約済各国を巡歴し、その後巴里に留まって諸學術を修める目的をもっていたのであった。

そこで慶応三年「卯正月九日暁第四時民部大輔殿御乗船大坂より横浜江着港即日同所脩文館江御旅宿同十一日早朝仏蘭西飛脚船江御乗組同日第九時横浜出帆」という

ことで、博覧会開期に溯る約三ヶ月前に出発したのであった。今ここにその旅程の概略を記してみると

慶応三年 正月十一日	横浜発	(西歴五月一日)	三日博覧会開く
	五日上海着		三日伊太利 チュロン
	二日香港		二日フロレンス
	五日柴碇	五月六日博覧会を觀る	二日朔日ミラン
	二日新嘉坡着	八月三日博覧会を又觀る	七日リボンヌ
	二日錫蘭島着	六日瑞西着	七日マルタ島
	二日亞丁着	二日ベルン着	三日馬塞里
	三日蘇士	二日ジュネーブ	二日リヨン
	三日亞歴山着	二日ベルン	二月五日カレイ
	二日墨西拿	二日海牙	七日倫敦
	二日馬塞里着	三日アマステルダム	三日ドヴァ
三月六日黎昂着	二日ライデン	二日白耳義	三日カレイ
七日巴里着	二日ナポレオン	二日ブラッセル	二日巴里
	二日三世と正式謁見	九月三日リエージュ	明治元年九月巴里発
			三月三日横浜着

で、約二年間の行程である。初めは凡そ五年を目あてに使命を果すということであったが、維新の政変と水戸藩主慶篤の薨去に伴う相続問題で急に帰国することになっ

た。
つぎに出帆当時の随員氏名を挙げると、

御勘定奉行格 外国奉行	向山隼人正	奥詰	井坂泉太郎
御作事奉行格 御小姓頭取	山高石見守	皆川源吾	加治権三郎
歩兵奉行	保科俊太郎	大井三郎右衛門	三輪端藏
御支配向 組頭	田辺太一	服部潤次郎	高松凌雲
調役	日比野清作	奥詰医師	山内文次郎
同	杉浦愛藏	右之分 大砲差因役動方 松平肥後守家来 伝習生式人	横山主税
同並出役	生島孫太郎	小笠原忠岐守家来 伝習生老人	海老名郡次
御儒者次席 御職方頭取	箕作貞一郎	御頼に而御周旋方 いたし候英の通弁官 アレキサンダー・ シーホルト	尾崎俊藏
通弁御用	山内六三郎		
民部大輔殿御附 大御番格	木村宗三		
砲兵差因役動方 御勘定格	陸軍附調役 洪沢篤太夫		
小姓頭取	菊地平八郎		

とある。これら随員は——博覧会を目的の一つとして、同時に渡航した他の人々もそうであるが——何を見、何を我に将来したのであったろうか。ともかく、我が国において、このパリ博覧会に参加出品したのが博覧会なるものに接した最初であり、我が博覧会なる語の起源が

徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義（黒江）

これより起ったという事実を以てすれば、その意義は深いものがあつたといわねばならない。

二、博覧会の会期と出品規則

それでは、博覧会の会期と主意及規則はどんなことであつたのであろうか。慶応三年三月に外国奉行から町奉行衆へ宛てた御触を見ると次のように書かれてある。

「仏国博覧会主意並規則書

仏国都府博覧会之儀は各国之生産品物天造人工之差別無之広く宇内之産物を一所に相集め觀覽を広め智識を増し候を本旨と致し候趣に有之候

一、西洋千八百六十七年第五月一日開局六ヶ月相立閉局之積に

候事

一、諸品物之儀は開局より閉局迄飭付置尤右品之内望之者有之候節は相對に而直組致し閉局之後に至り取引致候規則に候事

但差出候品物は都而無稅之事

一、展覽場中に而手細工に致し候品には望人有之次第即時売払候も不苦尤無稅に候事

但職人は詩繪師金銀細工師紙師陶器師大工指物師等宜敷趣尤諸入費は都而自分賄に候事

一、大神楽手品独樂廻し等之芸人罷越候儀勝手次第之事
但願出候者有之候節は諸入費は都而自分賄に候事

一、品物は新規之物には不年限旧き品に而も不苦候間可成丈よろしき品差出候事

一、品物は一種一品には不無限数品差出候而も不苦候事

一、品物差置候場所借受候には敷金等差出候に不及候事

但飭付方入用は差出候事

一、品物は当五月（慶応二年）中迄に取揃置六・七月頃仏国より軍艦渡来いたし候趣に付着次第積込シエス迄差送り同所より歴山亞迄蒸気車夫より他船に而も仏国都府迄差送候積り尤横浜よりシエス迄之船賃は差出に不及候へ共同所より仏国都府迄運送賃は銘々差出候事

一、差出候品物之内最上之分へは仏国政府より褒賞差出候積右褒賞受候品は各国之品より相勝候儀に付追々万国より注文受候趣に候事」(第三)

とあるように、会期は一八六七年五月一日（慶応三年三月二十七日）より同年十一月四日（慶応三年十月八日）までの六ヶ月間で、出品は一般からの応募形式を採っている。これは後の澳國博覧会（一八七三・明治六）に、政府において一切の出品を採集せられたのとは異なる所である。

ここで特に注意したいのは、規則書中の「万国より注文受候趣に候事」という項目で、このことは我が商人にとって相当魅力あることばであったに相違なく、万国博覧会に対する意識を強めさせ、次への発展の素地を作らせて行ったということは否むことができない。

つぎに、どんな人々がこの博覧会に出品しているのかその範囲をたずねてみよう。

三、我が出品者の範囲

慶応二年四月十五日の出品申告達書の中に

「(前略)万石以上以下領分知行出產之物品同所へ差送り度望之者は其筋へ可申立候且つ百姓町人に而も同様差出度ものは御差許可相成候間是亦其筋へ可申立候」(第三)

とあるように、各藩及び百姓町人までも募集したのであったが、実際出品されたのは、

幕府の出品一八七箱、江戸町人一五八箱、佐賀藩出品一五〇六箱、薩摩藩出品一四八〇箱となっている。こ

こで問題なのは薩摩藩の出品態度であって、当時幕府博覧会掛の出品事務計画としては一応出品物は全部江戸へ運上し検閲を経て長崎から出荷することになっていたが(第三)便法として目録だけ幕府に出して、品物は長崎に置き長崎奉行において其の目録と照合し、検閲済のものはそこからすぐに発送することにした。ところが薩摩藩は幕府に何等の許も得ず、「日本薩摩の政府」と書いた飾の下に勝手に二百五十六箱と、その後続いて二百二十四箱英船に積荷して博覧会に出品した。これには、日本における仏英両国の複雑な対立と、薩摩關係の政治的的反

目が表われていて微妙な形勢となり、仏国公使その他閑係者を憂慮させている。このことは「慶応三年九月、支配向之者琉球王之偽称を私定致候との風説弁解仕申上候書付」と題した向山隼人正の上申書に詳細に書かれている。(第三)当時仏国は幕府に非常な厚意を寄せていたけれども、英国は薩摩と結び、幕府に対していたのでこうしたことがおこり、このことが昭武の渡欧の途上、寄港地の歓迎振りなどにもよく表われていたが(第一航西日記)今はそれに触れないこととする。

四、出品目録

1 幕府および江戸商人よりの出品物

「仏国博覧会江御差送相成候品物目録書差上候儀に付申上候書付
 博覧会掛
 外国奉行

仏国博覧会江御差出可相成御品々々过程中不残御差送相成候に付右目録書式冊並商人共より差送り候品書付も同断都合四冊差上申候為先頃中英公使より以書簡右博覧会之節被差遣候役々並品物可差出者之名前品書付共承知致し度旨申立其節御返簡に添右之書付何れも被差遣候儀に有之然る処品物目録書之儀は多少之品数にて認方手間取候間御控之分は追て差上可申積外国奉行より申上候得共前書差上候目録書之儀は即英公使江御達相成候物と同様之儀に付右之分は最早別段差上不申候

徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義(黒江)

依之目録書四冊相添此段申上候 以上
 卯二月(慶応三年) 小栗上野介(外五名連記)(第三)
 とあって都合四冊の目録書(第三)が残されてあるが、その品目録を要約すると、左の通りとなる。
 (1) 幕府よりの出品物

官服之部	三種・二点	耕作之事を記せる書	八部・三冊
武器之部	二種・二点	辞書・英和对訳字書	五冊
書籍之部	二種・二点	・和蘭字彙	三冊
名所を記せる書	二部・二九冊		(一部・五冊)
草木培養を記せる書	九部・四冊	図画之部	一四種・三三點
碁将棋之事を記せる書	六部・三冊	音楽器之部	三種・三點
画式之書	三部・四冊	漆器之部	七種・三三點
生花の事を記せる書	四部・三冊	彫器之部	五種・九點
美術之書	二部・三冊	陶器之部	四種・二七點
家屋製造之事を記せる書	二部・四冊	金属器之部	二種・一九點
		雑品之部	三種・二九點
			(第三)

以上は幕府から差出された品目でその一つ一つには詳細な説明や題名が附されたものもあるが今は省略する。

(2) 江戸商人よりの出品物

武器之部	九種・五二点	傘履之部	六種・三二点
衣服之部	二五種・一〇七点	紙之部	九種・一八二点
織物之部	三三種・一三〇点	穀実之部	二五種・三二点
音楽器之部	二種・三二点	食料品之部	七種・三二点
漆器之部	三三種・三〇七点	家屋之部	二種・三二点
金属器之部	一四種・四〇点	農具之部	九種・三二点
陶器之部	三三種・一〇二点	駕籠之部	三種・五二点
彫器之部	一〇種・五二点	雑品之部	一四種・六二点
髪飾之部	四種・三二点		
図画之部附書籍	三種・二四二点		

(第三)

以上千百八十点で流石に商人より出品したものは、国産品として商業的価値の高いものが多く、外国人に対しては相当珍奇に思われそうなのが特に選ばれているようである。

しかしこれら出品物に対しては、一応の規準があったのであって、慶応二年二月三日、池田播磨守から勘定奉行へ町人共の出品物に対する紹介があったのに対して、勘定奉行から次のような返書があった。

「御書面之趣承知いたし候品書並規則等凡別紙之通りに有之候間尚又早々御触達し有之候様いたし度依之別紙相添御挨拶旁御達および候」(第二)とあり、「別紙」とし

て「仏国博覧会可差遣品書」と「仏国博覧会規則書」が添えてある。この規則書は前掲の分とほぼ同様のものであるが、但し一項目だけ「一、細工物其外都^ニ舶来之品不相用事」という一条があり、純国産品のみを持ち込もうとする幕府の意図的企画がよく見えている。又「可差遣品書」には出品物の規準が示されており、実際の出品物(前掲の商人よりの出品目録)を照合してみると、それに合わせていることがよくわかる。

2 佐賀藩よりの出品物

仏国領事宛佐賀藩からの出品覚書を見ると、「仏岡土へ差遣候佐賀家展覧物品立書」に茶碗類・皿類・并類・鉢類・重類取合・德利・植木鉢類・錦手小間物取合・花瓶類等締めて陶器五百式拾箱、内拾四箱破損に付不積入(第二)とあり、都合五百六箱として送られてある。

佐賀藩からは何といつても名産の陶器が多数出品されたということは意義あることで、藩の産業政策の中に企画されていたであろうことは容易に領けるところである。後の澳国博覧会の際は、政府の採集出品計画の中に佐賀県の磁器が入っていることからみても、「肥前侯の用意」というものの強い意欲をそこに見ることができるとおもふ。

3 薩摩藩の出品物

つぎに問題の薩摩藩をみてみよう。

慶応二年九月の覚書に、

「仏岡士江差遣候薩州家展覧物品立書」(第二)

「琉球国出產之品八種、國産塗器二十種、同陶台五種、同鉢石類二種、同諸材木十種、同植物種物、同農業道具四種、茶器二四種、竹細工物四種、竹細工物五種、反布十三種、小間物類十九種、茶・白蠟・煙草類、樟腦硫黃類等合せて貳百貳拾五箱、内六箱破損に付不積入分」

とあり、この品書については、前にも少し触れたが、仏國領事デウイリーの取計らいで何とか面目が立つようにしたため覚書として残されているものとおもう。以下少しくその間の事情を知る史料を漁ってみると

「仏岡士より差出候横文和解」(一八六六、一〇二八)

一、巴里府の万国展観場江出さんと志したる薩州の産物を入れ合せたる箱物を運上所を經過せずして船積する事を護せしめ給はん事を薩侯の名代人予に請へり

一、右日本の物件外国諸邦の展観物の如く運上所之取扱なくして日本国を輸出して仏朗西国に至る事兩國政府におひて妨礙なかるへし

略

一、薩摩の太守或る外国の人々と意を通ずる事ある故に必ず右箱物を我輩の意に背叛して輸送せんとするを思ひ猶勢権と威

徳川昭武の渡欧と住国博覧会出品の意義(黒江)

力を特に鬪論を發し此密送成し遂げんとすへきを思い是に処すへし且大名の政治を確実にするべき良策を得たりまきに日本の幸福なるへし是別事にあらす薩侯の名代人をして自から右物品を送り出すこと能はさらしむるにあり

略

一、此英船は仏朗西の伝信船より後れて巴里府に着するに因り予横浜に至るの後諸事巨細に(稱薩會事録)ミニストルに告報せはミニストル儀右薩侯の物品を外の日本産物と共に会場に出さん為に委事を我政府に申立るなるへし

一、此等の事件都て密かに取計ふ拙者の言葉を信用し給ふへし予まきに此一条の捷功を奏し兩國の政府我今日の所業を知るへし其意いかんとなれば予今此箱物の主となれり此故に鎮台尊下も亦此箱の主たる事明らかなり

一、事情如斯なるか故に希はくは尊下運上所の司長に命令して右物品を今日船積する事を許し給ふへし右船は唯此箱物之為に遲滞しある故に積請次第開帆すへし

略

尊下の辱僕生

エル・デウイリー

長崎鎮台江呈す(第二)

とあるように、仏領事デウイリーは種々苦心して、自分の品物として出しほしい、検閲を免除し船積を許してもらいたいとまで言っているのである。なおデウイリーは

能勢大隅守に「仏岡士デユリーよりも懇々申聞候趣にては方今之形勢英國初其他帝国人之内兎角諸侯^五私親を通し度存念之者も有之右品物差廻方之儀に付御取扱振彼是手数相掛夫が為自然延滞候様にて彼等如何様之手段を以密々差廻方奸計相働候哉難計方一右様之次第に至り候ては外国^五対し御不体裁は勿論第一御威光にも差響可申云々」と言い、デウイリー自身も本国に対し「役前も難相立」くなるから、荷物は一々自分が引受封印之上本国其場所役筋のもの^五向け書簡をつけて送ろうと言っている。

しかし、この間にあって仏人モンブランの策謀ありイワシタ（岩下佐次右衛門）の勲章事件等あり薩州は博覧会場においては殆んど独立国のような体裁で出品し臨んだのであった。

五、褒 賞

当時の仏国新聞訳（第一、第三）を見ると、

「千八百六拾七年第七月一日（一、廢曆三年五月二十九日）サンヅリチエイのアンヂストリー宮において博覧会褒賞の配分あり一略一今茲

に博覧会に出品せし人数は六万人に及ぶ且産物の量少なくとも二万八千噸を下らず如斯衆多の品物を速妙にこれを陳羅するを得しは他なし此会の為に欧州大地に蒸気車鉄軌を新営し

其交際を便利にせしによれり一略一如此大業を僅の日月の中になすに幸にその功を奏せり就ては此国の為には衆人の誉を博しまた皇帝の褒賞に預るへしとす世人博覧会につきては万国の品物を比較し學術進歩の輔翼とすることは驚くべき程なり一略一右様に其力を競ふ内に就てまた其最者を撰まざるを得ず右は此会掛りのものは多務なるによりこれをジュリーアントルナシユナル（公認并と）に委任せり是は各国の産物貿易等に明かなる人の会社なり其人等は各国をおもふの心なきにあらすといへとも事皆正理に基き私の依怙なきその勤をなせり其心を以て各国の各其先を競ふの意を抑へ其煩を憚からず功を奏するにいたりし事今日これを陛下の前に謹白す其褒賞を頒ち左の次第を以てせり

（大形金のメタイル）	六四	紫銅	六五六三
ガラソフリー	八八三	褒詞	五八〇三
金メタイル	三六五三		
銀メタイル			

かくまで多数の褒賞ありといへとも猶其賞すべきを遺すもの多かるへし一略一

と見え、各国からその技を競って持ち込まれた出品物に對しては、相当の手續きをとって褒賞が行われたわけである。

我が国の出品物もその選に入り、異邦にあって初めての記念すべき榮譽を受けた。

當時の向山隼人正よりの上申書に、

「―前略―御國産之内養蚕漆器手細工物並紙第一等之褒賞に相成候旨にて本月二日右掛り之もの別紙摺写之通黄金大形メ
 タイル持参いたし民部大輔御請取相成申候右褒賞に預り候は
 御國之外数箇國に限り格別御國榮にも相成候儀に付民部大輔
 殿より其段仏帝江御謝書被差遣私よりも博覧會副總裁ミニス
 トルデタ江謝書差送申候―以下略―」(第一)

と見え、特に日本の特産品たる養蚕・漆器・手細工物・
 和紙が第一等の名譽たる大形の金メダルを勝ち得たとい
 うことは、本邦製品が世界を相手にしての自信と抱負を
 もつことができたという点で劃期的なことであつたとい
 える。

なお精良之品差出候もの及掛りの者へも褒賞のことが
 あり、民間商人或は工匠にも夫々優秀なものに対しメダ
 ルが配分された。

こうしたことは、我が国生産者にとって、強い刺戟を
 受けたことは勿論であるが、又歐人賞讃の的となる物が
 如何なるものであつたかを知る上には貴重な機会と資料
 を与えてくれたものといえよう。

しかし褒賞を受けたということそのものが、そのまま
 我が産業を振興する上に役立つと見るのは早計で、む
 しろ同時に我が國が各國出品物の何を見て来たかという

徳川昭武の渡歐と仏國博覧會出品の意義(黒江)

ことに大いなる意義と価値があつた筈である。このこと
 については後節で述べることにする。

六、出品物の始末と販売価格

つぎに莫大な費用を償して運上搬入した博覧會の出品
 物は如何に始末されたのであつたらうか。慶応三年十月
 廿五日「仏國博覧會江御廻し之御品御払直段之儀に付相
 伺候書付」(第三)を見ると、其俣持帰つては、費用もか
 かることであるから望之者へ払下げた方がよいし、値段
 は、「海陸運送賃並外箱詰方人足賃迄分割を以割掛、其
 上三割之御益金見込先御払直段」としたらよいであらう、
 しかし欧州での御國物品売捌は今回が初めてのことであ
 るから、彼地之景況も難相分、各國との振合もあるし、
 値段の点で利益ばかりを考えては自然望之者も無之
 損失となるから実地において臨機の取計いをするよりい
 たし方がないであらうということが書かれてある。

実際には當時の國産品取扱方が認めていた元代帳(第
 三)に風袋諸雜費が加えられて、販売価格又は売却契約
 価格が定められたのであつた。

ではこれらの販売にはどんな方法がとられたのであつ
 たらうか。向山隼人正・栗本安芸守とフロリヘラルド及
 ビシペリランの間に結ばれた売却契約書(慶応三、十一、五)
 於巴里

を見ると、

「一前略—

一、モツシユール・フロリヘラルド右取締方を心得るは其コンシユルセ子ラルルたる職掌外の事なるを以て日本政府其謝金として品物売払高の五分を同人互互へんと許るしたり

一、モツシユール・シベリヤンは売捌方を全く引請け且日本政府損失なからしめん様常々注意し取扱ふに付博覧会中より仕来の通品物売払高の一割を謝金として受取るへし

一、右品物の員数並元価は別冊目録書之通なり

—略—

一、右品物売払方之儀は品物を差出したる日より二ケ年の間なりと定むべしと雖も若し右期限の内に此度定めたる売払の仕方にては売捌方不宜又望人少なき様子にて日本政府に大なる損失あらばモツシユール・フロリヘラルド及びモツシユール・シベリヤン兩人にて実直に右品物売払の取済方並に之れに属せる諸入費を減する手段を商議し之れを日本外国事務局へ申越し其指揮を待つべし —略—

追加一ヶ条

一、別冊価付より安価には売払間敷併し万一下直に売払ふ品ありとも総品之価にて元価に劣らざる様売捌くべく

—以下略—(第三)

とあり、博覧会出品払下げ及土産物を除いた残余品の販売が仏国商物仲買業者シベリヤンに委託されたわけで、

品物は巴里の最繁華街に移されそこで行われたのであった。シベリヤンが日本政府(幕府)から預かった品物は目録を見ると千十四点とあるが、この外更に同様の契約を向山・フロリを中に立て、江戸商人(六右衛門代)二郎・卯三郎との間にも結んでいる。

この契約は、はじめ一八六七年九月廿六日、日比野二郎・卯三郎とシベリヤンとの間に結んだものであったが一八六八年一月十日、前契約を廃して新たに取結んだものであり、期間が三年間であること、及び七万五千フランを前渡し年六分の利をとること、そしてこの借渡高はシベリヤン品物売捌方から差引くことが加えられている。

シベリヤンへ依頼した請負の販売価格は、慶応三年博覧会御差出価付帳(莖・式)(第三)に記載しているが、残り品に○印を付し、二年乃至三年の期間をおいたということも、その整理には相当の苦心と手段が払われたことを物語るものであろう。そして、期間が過ぎても売り捌けなかった場合は謝金は除いて、自身の入費で骨折ろう。それでもなお残る品物があれば無償で本国へ送り返そうという一札まで入れている所を見ると(第三)シベリヤンの覚悟の程がよくわかる。しかしシベリヤンに宛てた謝礼金の書付が残されているのを見ると、なおいくば

くかの残余品があつた模様である。

出品物はこのように全部仏人に請負わたせたのかという
とそうでもなく、商人自身せり売りをした場合もあつ
た。

「博覧会江差出候私共荷物之儀に付是迄品々申上候趣も御座
候得共猶篤と勘考仕候処元米右荷物之儀は糶売に仕度見込に
御座候間何卒去る六日奉願置候書面之通会場諸入費私共より
可差出分凡五万三千七百七拾八フ之内シベリラン方に預け有
之分老万七千フラン有之候間残り三万六千七百七拾八フ程は
暫時御操替置フロリ方江留置候荷物当月十七日(慶応三、十七)迄
に相渡候様御引合被成度左候へは来る十八日(西曆十二月十二日)糶売仕
右売捌代を以拝借金之分上納可仕候付而は会場諸入費高之儀
は御掛り様に而御吟味之上増減共被仰渡通無相違差出候様可
仕候其余都而前文申上候願面之通御聞濟被成下候様仕度依之
猶又此段願上候 十一月十三日 卯三郎」(第一)

これは向山隼人正宛に、フロリヘラルトに預けた自分
(卯三郎)の荷物をかえすよう取計ってもらいたい、そ
れを肥藩せり売りの場所で行いたい(第一)という申出
である。佐賀藩もせり売りにしているからというわけでは
ないにしても、荷物を早く処理するためには又止むを得
ない手段であつたかも知れない。

それでもなお残つた品物はどう処理されたのであろう

徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義(黒江)

か。後の澳國博覧会参同記要に見える。

「千八百六十七年巴里博覧会に出陳セシ日本品ニシテ売却ス
ルヲ得ザリシモノ許多アリ之ヲ巴里ノ某氏ニ委託シ置ケルニ
澳國博覧会の挙アルマデ売却ノ機ナカリシガ該会ニ於ケル日
本品一タビ好評ヲ博スルヤ此残品モ忽チ購買シ去ラレタリト
云フ」

という記事によつて、それから六年後の維納府博覧会ま
で持ち越されたということがわかり、ここで巴里の出品
物が好評裡に始末されることになつたのであつた。

七、博覧会が我に将来したもの

昭武渡欧の随員の一人である渋沢栄一の航西日記の中
に「博覧会を觀るに倍す」(慶応三、五、十八)と題して次のよう
な見学記事がある。

「人工の精しく学芸の新なる欧州競ふて著鞭の先を争ふ故に
此の会に出せる物品は何れも巧智を究め奢靡を尽し声価を世
界に博めむとす故に蒸氣機関の如き智機の靈工意匠の慘淡看
破すべき所といへども我輩其学に達せざれば其理を推究する
能はず雲烟過眼に看了ること遺憾といふべし只其見る所に
抛れば亞米利加より出せる耕作器械紡績器械は就中其尤たる
ものと称すべし英國は之に重ぐの説あり—中略—学術器械は
我輩其術芸に通ぜざるにより其發明の可否を認る能はずとい
へども医師道具及測量器の如き最品類多く見へ就中人身解剖

の真形を模せし紙細工など精工無比と覚ゆ又越列機篤見以て
図画を模出せる器械あり新發明なるよし電線機の新製なるを
多く出せしは瑞西を以て第一とせり——中略——

凡此の場合中欧州人といへども一週日を歴るに非ざれば尋常看
了する能わず況や其學術窮理上に關係する學識強記のものに
あらざれば耐へざるべし我輩言語通する能はず識見凡劣なる
加ふるに交際公務ありて数日縦観するを得ざるにより全く夢
裡の仙遊其光景の一斑を模糊に記するのみ」

この驚きはそのまま当時の日本人の驚きであり先進諸國
の出品物の前に立ち、學術究理の發明器械の便利さ、能
率の高さを見ては、如何にもしてそれを近い將來におい
て我に將來したいものと考えたのは無理からぬことであ
ったであらう。

瑞西を以て第一とした電信機については早速慶応三年
八月八日購入の手續をとっている(第一)。そして、その
用法の伝習を受けるために、田辺太一・箕作貞一郎兩人
が差遣わされた。言葉も十分通じ兼ねた兩人の習学も並
大抵ではなかったとおもうが、瑞西電機製造所長・同電
信学校長の厚意で気永く教授を受け会得したのだった。
その時の様子は両所宛の謝状によく表われている(第二)

なおそのほか、三十数ヶ国よりの出陳物に対する觀察
の範圍は実に広汎に亘り、欧州の風俗習慣は勿論、政治

・經濟・美術・工藝・軍事等百般のことに及んでおり、
これらは何らかの形で我が國に持ち込まれ我が文明の前
進に役立ったことは、多彩な明治文化の足跡を見れば明
らかである。

殊にこの時、佐賀藩からの博覽会の事務官長として派
遣せられた佐野常民が、六年後の澳國博覽会の副總裁と
して就任し活躍しているということ、並びに随員の一人
である渋沢栄一が後の実業界の大立物となっているとい
うことは興味あることで、機未だ熱せざる幕末の混乱期
にこの挙あり、これに従った人々の中から、産業・經濟
・文化万般に及んで明治初期を形成するものを輩出させ
たことは意義深いことであらねばならぬ。

結 語

昭武は博覽会での任務を果たした後、英・白・蘭・瑞西
・伊の締盟諸國を歴訪し、当時欧州にあった日常の文化
機關には殆んど接触したわけであったが、殊に新聞・蒸
汽車(鉄道)・電報・銀行そして軍事教練等我に足らざる
ものは一として見逃すことなく持込みたいという希望と
責任を感じたであらう。

昭武の使命が所期の目的のように単に幕府の威信を中
外に宣揚するためのみならば、これは明らかに幾許かの

誤謬を犯しているものであり、当時の巴里の都にとつては好意的以外の受け入れ方はなかったと思われる。又ロセスのその勧誘は、倒産一步手前にある幕府を盛り立てようとした仏国の政策であり、一種の投資企業とみて差支えないのである。

しかしこの期において博覧会に出品したということはその動機が如何様であらうとも、前述の如き点において長い鎖国政策の中にあつた日本が急速に先進文明将来の機会を捉えたということに眞の価値を認めねばならない。

更にこのことは、時恰も開国に向う途上、新興日本の近代的経済様式へ移行する一端と見ることができ、当時、幕府（江戸）とその周辺及び佐賀・薩摩から世界市場へ接近しようとする強力に意図的産業政策の萌芽が、でて来ていると見て差支えないのではなからうか。

これが明治六年、明治政府の政策として打出された産業の近代化を目的の一つとする維納府博覧会に参同した意義の前提としても高い歴史的価値をもつものといわねばならない。

註

史料（第二）…徳川昭武滞欧記録第一（日本史籍協会）

〃（第二）…徳川昭武滞欧記録第二（日本史籍協会）

徳川昭武の渡欧と仏国博覧会出品の意義（黒江）

史料（第三）徳川昭武滞欧記録第三（日本史籍協会）

参考文献

大塚武松（編）『川勝家文書』（日本史籍協会）

〃 『渋沢栄一滞仏日記』（〃）

田中芳男 『澳國博覧会参同記要』

永山定富 『内外博覧会総説 並に我國に於ける万国博覧会の問題』

田辺太一 『幕末外交談』

大塚武松 『幕末外交史の研究』

尾佐竹 猛 『夷狄の國へ（幕末遣外使節物語）』

〃 『幕末外交秘史考』

大日本山林会（編）『田中芳男君七六展覧会記念誌』

本間榮寛 『佐野常民伝』 海軍の先覚日本赤十字社の父

土屋喬雄 『明治前期經濟史研究第一卷』